

学会の役割

岩中 貴裕

山口学芸大学

JAILA JOURNAL は今年で第5号の刊行を迎えることができました。縁がありまして私は、創刊号から第4号まで編集委員長を務めさせていただきました。他の学会でも紀要編集の仕事をさせていただいたことがありますが、非常に気を使う業務のひとつに査読者の決定と依頼があります。論文の内容を精査した上でその論文を審査するに相応しい専門性を持った査読者を選び、査読を依頼するというプロセスになります。同じ学会の会員ではありますが、面識のない人に査読を依頼するのは気を使います。また、お断りされても致し方ないことです。しかし、JAILA JOURNAL の編集委員長を務めさせていただいた4年間、査読をお断りされたことは一度もありません。しかも多くの査読者の方が、執筆者の労に敬意を払い、「どうすればこの論文がさらに良いものになるのか」について真摯に考えてくださいました。編集委員長として査読者の方のコメントを確認する度に、「JAILA JOURNAL はまだ歴史は浅いけれど、必ず素晴らしい JOURNAL になる」と確信しました。新しい編集体制の下で、これからさらに素晴らしいものになっていくものと期待しております。

私事ですが現在、シンガポールで開催されております 54th RELC International Conference に参加しています。委員会、教授会、書類作成等の様々な業務のため落ち着いて研究をする時間が取れない日々を過ごしていましたが、久しぶりに、朝から晩まで研究と英語にどっぷり浸かるといっても幸せな時間を過ごしています。わずか3日間ではありますが、研究、そして学会の役割について沈潜する貴重な機会になっています。

先日、ある知人が「最近、学内の業務が忙しいので学会にほとんど行っていない。でも研究をする上で特に困っているとは思わない。必要な資料はほとんどオンラインで入手できる。論文も PDF ファイルを入手して読むようにしている。発表とその後の10分程度の質疑応答のために高い交通費と時間を使うのはもったいない。」というようなことを言っていました。この発言に対して、皆さんはどう思われますか。私は、学会へ参加することの意義を理解しておられない気の毒な方だと思いました。

学会に行くたびに強く感じさせられるのは、研究を深めるためには他の人との知的な交流が不可欠だということです。研究に対してやや行き詰まりを感じている時に学会へ行くと、そのありがたさを強く感じることができます。これまで何度も学会で、他の先生方の発表やシンポジウムから自分の研究を深めるための示唆をいただきました。確かに学会で発表しても、発表時間は20分、そしてその後の質疑応答は10分程度です。しかしそれだけのために学会へ行くのでしょうか。そうではないと思います。私は他の研究者との「対面的かつ促進的なかわり合い」(face-to-face promotive interaction) を求めて学会に行っています。深いレベルの学びが他者との対話を通してもたらされることは、多くの研究者が指摘しています。これは研究者である我々にとっても同じです。

対面的かつ促進的なかわり合いの場を提供するという点において、JAILA は非常に成功している

と思います。JAILA の全国大会に行くと、参加者全体が 1 つのコミュニティーを作って互いに学び合い教え合おうとしている雰囲気を強く感じます。皆さんの英知を結集して、これからさらに JAILA を発展させていきましょう。